

武蔵野文化協会ニュースレター

「甲野勇 くにたちに来た考古学者」を見る

編年学派三羽鳥の一人と言われ、武蔵野文化協会でも活躍した甲野勇の業績回顧展である。戦中の戦争協力要請圧力のなかで考古学が難しい立場に置かれた時代にも時流と距離を置いて乗り切り、戦後は友人の山内清男が脚光を浴びる中、ひたすら在野の研究者としての立場を崩さなかった甲野の生涯を、①博物館をつくる、②次世代へつなぐ発掘調査と指導、③くにたちと甲野に区分して解説している。

①博物館をつくるでは驚嘆すべき量と質の業績に驚く。この展示から新たな発見をした方も多かろう。古い写真に筆者がお世話になった東京都の渡辺武雄さん・丸山孝さんを見つけ感慨深かった。彼らの献身的なジオラマ製作等なくして甲野の武蔵野博物館は成立しえなかったからである。解説文によれば甲野はスカンセンを訪ねていないらしい。あの独特の雰囲気味わってもらいたかったと残念に思う。甲野資料の一部はくにたち郷土文化館ウェブサイトでもみられる。

②の発掘と教育の展示では、「科学的な古代史には、考古学的事実が必要」という彼の持論が遺憾なく示されている。

③をみて、甲野はなぜ国立に長く住み続けたのであろうかと思った。日本にゲッチングンのような大学都市を創ろうとした国立のまちづくり思想に共鳴したのだろうか、リベラルな住民の存在を評価したのであろうか。学芸員によれば「くにたちの自然」が彼を虜にしたからとあったが、同時に、晩年には「さらなる自然の地へ」と武蔵野西郊に土地を探していたとも聞いた。武蔵野に生き、考古学に人生をささげた甲野は66歳で世を去った。しかし、残された8600点の資料と業績は今も燦然と輝いている。(樋渡達也)

◆会員の動向◆

●「甲野勇資料」と「甲野勇 くにたちに来た考古学者」展の開催

甲野勇資料が国立市に寄贈されて四半世紀、8600件に及ぶ資料が整理・データ化され、去る7月22日から9月12日までくにたち郷土文化館で開催された。甲野勇氏は、昭和23年7月本会発足幹事のお一人で、同年10月に開館した武蔵野博物館を6年間運営された。甲野勇資料は、甲野先生の足跡と本会の昭和初期の活動状況を探る貴重な資料群である。

次号『武蔵野』に担当学芸員中根聖可氏「考古学者甲野勇博物館をつくる」を収録予定。(事務局)

●東京・埼玉の考古学界 新情報のご案内

①第47回 東京都遺跡調査・研究発表会 オンライン開催のご案内。都教委と世田谷区教委主催。

11月21日(日)10時～15時20分。発表会の視聴無料、事前申込不要。東京都生涯情報ホームページで確認。公開講演「古墳時代の野毛と上毛野」寺田良喜氏。一般発表は高輪南町遺跡(港区)ほか6件。

②埼玉県立歴史と民俗の博物館 開館50周年記念 特別展「埼玉考古50選」10月9日(土)～11月23日(火・祝)土偶・埴輪など優品900点を厳選し50のテーマで展示。10月31日(日・土偶)と11月21日(日・埴輪)の特別展記念講演会。アクセス、コロナ対策、中止や延期の問合せ048-641-0890。

(チラシ参照)

(高麗 正)

武蔵野文化協会

連絡先 〒362-0011 埼玉県上尾市平塚976-5 (加藤方)

電話・FAX 048-775-6918 メール kt-isao@jcom.home.ne.jp

ウェブサイト <https://musashinobunka.jp>

●お知らせ：コロナ禍で紙上例会でした見学会は、11月例会から状況を判断しながら再開します。12月例会は、会場の都合で開催しませんが、2月例会以降の実踏の詳細は、後日葉書にて通知します(1月は休会)。

I 12月紙上例会 国指定特別史跡・特別名勝・小石川後楽園庭園・唐門復元

小石川後楽園唐門復元現場の紙上見学会。空襲で消滅したものを2020オリンピックを機会に復元。現代の復元工事としては注目すべき高レベル工事です。レジュメ編は、紙上例会にあたり写真と図面を中心に編集。実際の現場では、折角の彫刻も大部分は扁額に隠されて見えないので、今回は全景を披露。小石川後楽園(岡山の後楽園と区別するためこのように言う)の面積は70,847㎡、水戸徳川家の上屋敷の庭として寛永6年(1629)回遊様式日本庭園として創られました。唐門は内庭から本庭へ入る庭門です。(樋渡達也)

II (令和4年)2月例会 渡来人の郷 新座郡の古代遺跡を探る

新座郡は、新羅郡から改称した時期は不明ですが8世紀中頃、入間郡を割いて設置されたといわれています。郡域は、現在の朝霞市・和光市・新座市・志木市・西東京市です。朝霞市域の古代遺跡を中心に、巡ります。北朝霞駅-黒目川沿い-浜崎(埋蔵文化財センター)-朝霞市立郷土博物館-城山公園-氷川神社-柵塚古墳-湧水代官水-朝霞駅へ。(本会考古学部会共催)

III 3月例会 言問団子と黄檗宗弘福寺を巡る

桜の名所、隅田堤(墨堤通り)から江戸情緒が残る粋な町、江戸っ子の憧れの町、向島界隈を散策しませんか。東京スカイツリーから三角の鳥居とライオンのいる三囲神社を訪ね、黄檗宗弘福寺を目指します。弘福寺は、宇治の黄檗山萬福寺の末寺です。目黒五百羅漢寺・海福寺に続く江戸の黄檗宗寺院見学となります。春日の局の孫で徳川家光の側近・稲葉正則が干拓や福祉事業に熱心であった鉄牛を開山に招き、以後多くの大名(鳥取藩池田家・彦根藩井伊家・津和野藩亀井家など)が帰依。風外慧薫の咳の爺婆尊をお参り勝海舟も禅を学んだ黄檗の寺を訪ねます。(松原典明)

◇ 図書紹介 ◇

●坂詰秀一『転換期の日本考古学-1945~1965文献解題-』(雄山閣、B5判、310頁、9000円、2021.7.25)
前編I、日本「植民地」考古学の潮流 II、転換期の日本考古学-1945~1965-。後編 転換期の考古文献戦後から1965年までの約480の考古学文献を総覧。詳細は次号『武蔵野』に収録。また西谷正「書評・新刊紹介」を参考(『考古学ジャーナル761』2021.11刊)参照。

●松原典明編『墓からみた近世社会』(雄山閣、A5判、230頁、2600円、2021.8.10)
近年の考古学的な調査をもとに、墓所と位牌・葬送の実態・親族形成・儒家の葬制など多様な視点から大名墓を検討し近世社会のありよう、またその思惟を照らし出す。11氏による六章12編の編著。

◇ 最新情報 ◇

●高輪築堤の発見！ JR東日本は昨年7月品川開発プロジェクトの計画エリア内から1872年に新橋・横浜間で開業した日本初の鉄道を海上に通すため、現在の田町駅付近から品川駅付近まで約2.7kmにわたって築かれた「高輪築堤」の一部(約800m)が出土したと発表。開発を進めるか、全面保存するかJR東日本と日本考古学会・鉄道史学会などと保存をめくり注目されている。次号『武蔵野』に収録予定。

◇ 会員の声 ◇

●2017年に恩師である坂詰秀一会長に勧めいただき入会しました。改めて由緒ある会に入会できたことを大変嬉しく思っています。また『武蔵野事典』の執筆にも関わらせていただいたことも、とても誇りに感じています。現在、国分寺市で観光考古学を中心に取り組んでいます。2022年には、武蔵野文化協会に続き、史跡武蔵国分寺跡が指定100周年を迎えます。武蔵野の古代を代表する史跡の保存・活用と観光まちづくりを推進していきたいと思っています。(三鷹市:増井有真)

●平成29年(2017)に、現在の職場である清瀬市郷土博物館に就職するにあたり、武蔵野地域の歴史をさらに深く知るために入会しました。現在は、市内に残る富士講や考古資料あるいは近現代資料を用いた展示・講座を毎年開催しています。中々、見学会や講演会に参加できていませんが、紙上例会の開催やWEBサイトが公開されている事で、様々な武蔵野地域の情報が得られ、大変ありがたく思っています。可能であれば、武蔵野地域の富士塚を巡ることができればと思っています。(多摩市:中野光将)

※次号「文協ニュースレター」第4号は1月発行。「会員の声」寄稿は、本会へ入会の動機、思い出に残るフィールドワーク、今後希望する事業、研究成果を200字程度で。「情報提供」は武蔵野に関する動向(チラシのみ提供可)、投稿者は事務局へ、次回原稿〆切12月下旬厳守。

(「武蔵野文化協会ニュースレター」第3号:令和3年11月1日発行)